

余暇時間の構造とその社会経済的背景

——社会生活基本調査の個票データを用いた実証分析——

○東京大学 石田賢示
東京大学 佐藤 香

1 問題関心

本報告の目的は、生活時間のうち、生理的に必要とされる1次活動時間、労働市場や家庭における生産活動である2次活動の時間を除く、3次活動の時間を余暇時間とみなし、その量的、質的構造が社会経済的地位や世帯の状況などによりどのように異なるのかを検討することである。本報告では、余暇時間の長さを量的構造、余暇活動のタイミングや順番の特徴を質的構造と呼び、検討を進める。

余暇時間の構造が社会経済的条件から自由でないことは様々な研究から明らかにされている。しかし、余暇時間に着目する研究領域に関する限り、既存研究の多くは余暇時間の量的構造に関するものであった。1日を通してみれば同程度の余暇時間が得られていたとしても、なかには余暇時間が断片化し、そのなかで取り組める余暇活動が限定的にならざるをえない人もいるかもしれない。このような余暇時間の質的差異と、その背景との関連をとらえるためには、1日の生活時間全体を把握するデータと、それを縮約する方法が必要となる。

2 データと方法

本報告では、以上の問題関心にもとづき、総務省が実施した「平成23年度社会生活基本調査」A票（以下「社会調」）の個票データを独自に集計・分析することで、余暇時間の量的・質的構造とその背景に対してアプローチする。被説明変数は余暇時間の長さおよび余暇時間の類型であり、これらは1日の生活時間の質問に関する回答内容から作成される。特に後者の余暇時間の類型については、系列分析（Sequence Analysis）およびクラスター分析による類型化をおこなう。これらの被説明変数に対し、学歴、個人・世帯収入、職種の情報を説明変数として用いるほか、世帯特性や年齢などを共変量として用いる。余暇時間の長さに関する分析は重回帰分析、余暇時間の類型に関する分析は多項ロジスティック回帰分析の方法を用いる。分析は、男女別におこなう。

3 結果とまとめ

分析の結果、男女ともに余暇時間の配分パターンについて5つの類型が得られた。男女間で若干の差が見られるが、2次活動により余暇時間がとりにくい類型、休養中心の類型、趣味中心の類型、趣味中心で交際活動にも活発な類型、交際・社会的活動中心の類型である。

多変量解析の結果、余暇時間構造との対応が比較的明確にみられたのは学歴であった。学歴が高いほど余暇時間が長く、集中的に余暇活動に従事しやすい傾向が見られた。一方、学歴が低い場合には余暇時間の短い傾向があり、余暇時間は自宅での休養中心になる傾向がある。職種は余暇時間をとれるか否かと主に関連し、これらの変数を統制した後の収入については明確な関連が見られなかった。

学歴と余暇時間構造の対応関係については様々な解釈がありうるが、生活行動やライフスタイルを通じた社会的地位の境界形成に、学歴が一定の影響を及ぼしていると考えられる。この点については、社会的地位をより明確に定義した上でさらなる実証的検討を加えることが求められる。

【謝辞】

本研究は、東京大学社会科学研究所 CSRDA2016 年度課題公募型共同研究「わが国における就業と生活行動との関連性についての多角的研究」（研究代表者：伊藤伸介）の成果の一部である。「社会生活基本調査」の調査票情報については、統計法第33条に基づき提供を受け独自集計した。